

葛飾区史編さんだより

261027

Vol.5

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 26 年 8 月 24 日 日曜日 午後
2 時から、南綾瀬地区センターにて
「昭和の葛飾を伺う会」が開催されま
した。

多くの方にご参加いただき、南綾
瀬にまつわる様々なお話を伺うこと
ができました。



下千葉のツマモノ栽培

現在の東堀切、堀切の一部は下千葉といいました。昭和 20 年代まで、この地域ではツマモノと呼ばれる野菜が盛んに栽培されていて、現金収入を上げていました。

ツマモノとは和食の料理に飾りとして添えられる野菜です。たとえばお刺身のツマモノという
と大根の細切りが有名ですが、高級料理ではメジソやホジソなどの青味のある小さな野菜が彩り
として添えられます。

メジソは畳 2 畳分くらいの畑で密集栽培されます。それを収穫すると、ピンセットで選別し、
丁寧に箱詰めされ、築地市場に出荷されました。

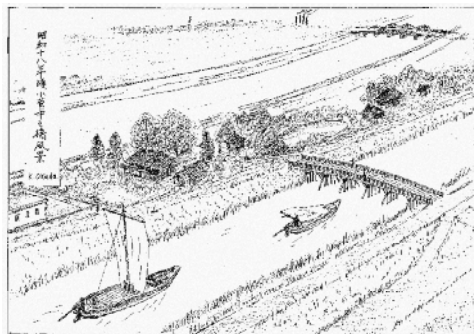
下千葉で栽培されていたツマモノ野菜にはメジソ、ホジソのほか、小さなカブや細根大根があ
ります。

小さなカブは羽根つきの羽根くらいの大きさのカブです。これも食べるというよりはお弁当や
料理の端に添えられる飾りのような役割をします。

また、細根大根という大根は、親指ほどの太さの大根です。これも料理に添えられるもので、
とくに高級料亭や弁当屋からの需要が多くありました。東京では高級料亭のことを「お茶屋」と
呼ぶことから、細根大根などを「お茶屋もの」と呼んでいました。

細根大根はたいへん高く売れたため、明治時代から昭和 20 年代にかけて盛んに栽培されまし
たが、手間のかかることからその後作られなくなり、現在は幻の野菜となりました。

綾瀬衛生研究所



現在の小菅水再生センターのある場所には、綾瀬衛生
研究所という東京市の施設がありました。この施設は
昭和 5 年に建設されたもので、し尿の近代的な処分施
設としてわが国でもごく初期に出来たものでした。

戦後はし尿を収集する桶を作る工場として運営さ
れ、昭和 34 年ころまで操業していました。

東京都心部のし尿は下肥と呼ばれ農村で肥料として
使われましたが東京近郊の農村が次第に都市化してき
て処理が追いつかなくなると、現在のような下水道を
はじめとする近代的なし尿処理の方法が考案されるよ
うになります。

綾瀬衛生研究所の技術は微生物を使ってし尿を分解するという、当時としては画
期的なものでした。

上図は、堀切四丁目の岡田菊造さんが昭和 18 年頃の施設周辺の様子を回想して描いたものです。左
端に描かれているのが当時の綾瀬衛生研究所です。

綾瀬川での水泳・魚釣り



昭和 20 年代の水戸橋付近

江戸時代、鯉釣りの名所として知られていた綾瀬川。大正時代の終わりころまでは、川の中に藻が生えていて、非常にきれいな水が流れ、水泳も出来たそうです。

今回の「何う会」に集まった昭和 20 年代にお生まれの人たちが子供のころは、すでに家庭から出る雑排水が流れ込み、工場の廃液も混ざって汚れが激しい川になっていたようです。

堀切の「何う会」でも話題になった蒸気船は「ポンポン蒸気」といって、昭和 20 年代も通っていたそうです。「ポンポン蒸気」はその名の通り、走行するときにエンジン音がポンポンと

鳴る小型船です。小菅の人たちが花畑（足立区）の西の市に行くときには船が便利だったので、乗っていく人が多かったそうです。通常の運航が終わった後も西の市などの行事のときには運航されていたのでは、と記憶されている方もいました。

京成分譲地



下千葉は昭和 20 年代から急速に住宅地化して行きましたが、具体的な形として、京成分譲地と呼ばれる住宅分譲地が出来たことがあります。

この京成分譲地お花茶屋は戦前から計画があったようです。場所は現在の共栄学園の北側に計画されていたものようで、戦前の地図には住宅地用に区画された跡が見受けられます。

京成分譲地はお花茶屋のほかにも柴又でも分譲が行われました。下水道が完備された、当時としては高級な住宅地です。

「何う会」でのお話では、こうした住宅に住む人たちは大企業の管理職などが多く、「お金は出しますけれども、町内会の仕事は勘弁してください」というスタンスだったということです。

東堀切にお住いの杉浦もよさんのお話によると、京成分譲地は昭和 14 年にはもう区画が作ってありましたが入居する人がなく、スキの野原のようになっていました。杉浦さんはそこからスキを刈り取ってきて、なすの畑の敷物にしていたそうです。

共同水道

戦後になって都市化が始まると、あちこちに都営住宅などの小規模な住宅が建つようになります。

こうした住宅の水道は共同水道と呼ばれるものでした。共同水道は私営のものが多く、公共の水道が完備されるようになって洗濯や米ときなどには共同水道を利用する家も多く、昭和 40 年代までは残っていました。

共同水道のシステムは 10 軒くらいがひとつのグループを作りひとつの蛇口を管理していました。各家では真鍮でできたカギを持っていて、必要な時にそのカギを持って水道の栓を開けます。料金は均等割りで支払いました。

ダンスホールと演芸場

昭和 12 年の地図で確認すると、旧南綾瀬町の町役場は現在の南綾瀬小学校に隣接しています。この前を南北に通る道は水戸街道に通じる道で、人や車の往来が昔から多い道でした。

この道筋に住んでいた方のお話によると、昭和 10 年代は牛車や荷車に野菜を積んだ農家の人たちが千住の市場を目指して、舗装のされていない道を踏みしめる車輪や人の足音が目覚めたものだといいます。

南綾瀬町は畑や水田の多い場所でしたが、現在の南綾瀬小学校の近くにはダンスホールがあり、賑わっていたということです。

南綾瀬町に比べ、小菅は比較的早く開けていて、旧水戸街道を挟んで商店が軒を連ねていました。なかでも東洋館と呼ばれる演芸場は良く知られていました。現在もそこで使用していたと見られる太鼓が保管されています。